

新潟地方気象台の3か月予報に基づく農作物等の管理対策（第2報）

令和元年5月8日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台から平成31年4月24日に発表された「北陸地方3か月予報」によると、5月は平年と同様に晴れの日が多く、気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みです。

また、6月は平年に比べ曇りや雨の日が少なく、気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量は平年並または少ない確率ともに40%です。7月は平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。

今後の気象変動に十分留意し、下記の管理対策の徹底をお願いします。

記

I 水稲

1 育苗管理

- (1) 5月は晴れの日が多く、晴天時には育苗ハウス内の気温が急速に上昇するため、換気を十分に行い温度管理を徹底する。育苗後半は外気に慣らして徒長を防止する。
- (2) 苗の老化防止と田植え後の活着促進のため、稚苗では田植え前4～5日（1.8葉期）頃に1箱当たり窒素成分で1～2gを追肥する。ただし、軟弱・徒長苗の場合は障害の発生が懸念されるため施用を控える。

2 本田管理

- (1) 田植えは風の無い暖かな日に行い活着を早める。徒長により下葉が極端に黄化して老化が進んだ苗は、天候の良い日を逃さず速やかに植え付ける。
- (2) コシヒカリの田植えは5月10日以降とするが、極端な遅植えでは登熟気温が確保できなくなるので、移植の晩限を守る。栽植密度は、平坦地では坪当たり60株、山間地で70株を基準とする。特に、過剰生育になりやすい地域では坪当たり50株程度に下げ、籾数を適正に制御し、品質低下を防止する。
- (3) 新之助の田植えは、平坦地で5月中旬をめやすとする。晩生品種であるため移植晩限に注意する。栽植密度は過剰生育を防ぎ、適正な生育量に制御するため、坪当たり50株を基準とし、過度な疎植は避ける。
- (4) 飼料用米や業務用米の晩生品種（あきだわら、いただき、あきあかね）は、登熟可能な気温が確保できる時期に出穂するよう、田植えを5月中旬までに実施する。栽植密度は品種特性を踏まえたものとし（下表）、適正穂数を確実に確保する。

【品種別の栽植密度のめやす】

品種名	栽植密度（株／坪）
あきあかね、あきだわら	60
いただき	50～60

- (5) 本田で苗が活着するまでは3～4cmのやや深水とし、保温的な水管理により植え傷みを回避する。特に低温や強風の日にはほ場をよく見回り、田面が出ないように湛水を徹

底する。活着後は水温の上昇を図るため2～3cmのやや浅水とし、分げつの早期発生を促す。

- (6) 除草剤は、田植え後の一発処理剤の使用を基本とする。除草効果を高めるため、散布後4～5日間は除草剤の剤型別に応じた適正水深を保つ。また、散布後7日間は止水とし、落水や掛け流しはしない。
- (7) 除草剤は、雑草の種類、大きさ（最大葉齢）、水稻の生育状況等を把握し、適用条件内で早めに散布する。直播栽培ではイネとヒエの葉齢が近くなり除草剤の散布適期幅が短くなるので、散布が遅れないよう、イネとヒエの葉齢を確認して適期に散布する。
- (8) 植え傷みにより活着が遅れている場合は薬害が発生しやすいので、生育の回復を待って除草剤を散布する。薬害防止のため、異常低温時または異常高温時には除草剤の使用を避ける。
- (9) 田植え後20日頃から好天時には地温が20～30℃に達し、生わら春施用田では土壤のワキの発生が多くなる。夜間落水等ガス抜きを行うことで、土壤への酸素供給などを図り根の健全化に努める。

3 病虫害防除

- (1) いもち病多発地のコシヒカリBL、飼料用米や業務用米の多収穫栽培、新之助等のいもち病に対する抵抗性が弱い品種並びに地力の高い圃場で作付けする場合は、育苗箱施用等の葉いもち病防除を必ず実施する。
- (2) 水稻育苗ハウスの後作で野菜類の栽培を予定している場合は、野菜類における農薬残留基準値の超過を防止するため、育苗箱施用剤は必ず育苗箱を本田まで移動した後に散布する。その場合、余った苗や薬剤を処理した床土等は育苗ハウス外で処分し、ハウスに戻さない。
- (3) 斑点米カメムシ類の発生密度を低下させるため、農道・畦畔等の雑草の予防を徹底する。草刈りは5月下旬から、雑草種子が結実しない間隔（およそ3週間）で行う。

II 大麦

1 病虫害防除

- (1) 出穂期は、暖冬少雪の影響からかなり早まり、おおよそ4月第5半旬頃となっている。また、地域間差は小さい。
- (2) 赤かび病の発生量は平年比やや多く、発生時期は早い予想である（病虫害発生予察情報・予報第1号、4月1日公表）。
- (3) 赤かび病の防除は、開花期（出穂期の4～7日後頃）とその7～10日後の2回を確実に実施する。団地等で広域に一斉防除する場合は、可能な限りは場ごとの防除適期に散布する。
- (4) 刈り取り前に赤かび病の発病状況を調査し、発生した場合は正常麦と別に収穫し別乾燥・調製を行う。

2 収穫

- (1) 本年は出穂が大幅に早まったことから、適期収穫が実施できるよう、収穫・乾燥作業体制を速やかに整える。
- (2) 成熟期は、大部分の穂・穂首が黄変し、子実が「ろう」位の硬さになった頃である（水分35～40%では、爪で押すと割れる、又はつぶれる）。出穂後の積算気温では650～700℃、登熟日数では35～40日が目安である。

- (3) 収穫の開始は、成熟期から2～3日後で、穂軸や茎葉が完全に黄化し、大部分の穂首が傾き始め、穀粒水分が35%以下に減少した頃とする。大粒傾向で空洞粒が多くみられる場合は、穀粒水分25%を目安とする。
- (4) 収穫適期幅は4～5日程度と短く、刈遅れると、粒が褪色し、穂発芽、カビ粒が発生して品質が低下する。一方、早刈りは、白色未熟粒や開溝粒、空洞粒の発生を招くので避ける。
- (5) 赤かび粒や麦角粒の混入を防ぐため、荷受け時の混入確認を行う。多発ほ場では収穫・乾燥・調製を正常麦と区分して実施する。
- (6) 熱損粒や赤かび粒の増加を防止するため、収穫後は迅速（収穫後4時間以内）に乾燥を開始する。
- (7) 細麦の混入を防止するため、ふるい目2.3mm以上を使用し、粒の選別を徹底する。

Ⅲ 大豆

1 施肥、耕うん・砕土

- (1) 耕うんやは種に向けて、ほ場の乾燥の促進並びに立枯性病害（茎疫病、黒根腐病）防除のため、遅くとも周囲の水田に水が入る前に、排水対策を実施する。
- (2) 土壌pHが低いと根粒の活性低下や栄養分の吸収抑制の他、茎疫病の発生も助長されるので、土壌pHが6.0～6.5になるよう石灰資材で確実に酸度矯正を行う。
- (3) 大豆作付け回数の増加や連作により、収量の低下や小粒化が見られるほ場では地力の補完のため、堆肥や緩効性肥料を利用する。
- (4) 出芽・苗立ちの向上と生育の促進を図るため、15cm程度の耕深と70%の砕土率を確保する。特に、水田転換初年目のほ場はゆっくり丁寧に耕うん作業を行う。
- (5) 耕うんからは種までの一連の作業は、降雨や乾燥の影響を避けるため、一日で完了するよう作業計画を立てる。

2 は種

- (1) は種は5月20日から6月20日の間に行い、は種期に応じた栽植密度を踏まえは種量を調整する。
- (2) 畝立ては種は、生育過剰にならないよう5月25日以降には種する。畝の高さは、10cm程度とし、培土用の土が不足しないよう高くしすぎない。
- (3) は種後に晴天が続くと予想される場合は、は種深をやや深めとし、土壌の乾燥による出芽率の低下、出芽の不揃いを防ぐ。

【品種別のは種期及びは種密度】

品種名	は種時期	目標 苗立数 (本/㎡)	は種密度		
			畦幅 (cm)	株間(cm)	
				1粒播き	2粒播き
エンレイ	5月20日～6月10日	9～10	75	10～11	21～23
エンレイ	6月11日～6月20日	13～18		6～8	12～16
あやこがね	6月11日～6月20日	16～19		5～7	10～14
里のほほえみ	6月1日～6月20日	9～18		8～10	16～21

注) は種密度の目安（畦幅および株間）は苗立率を80%として算出した。

3 病虫害防除

- (1) 自家用エダマメ等はウイルス病に感染していることが多く伝染源となるので、大豆

作付けほ場周辺では栽培しない。褐斑粒の発生を防止するため、アブラムシ類を対象に薬剤を種子処理（塗沫）する。

- (2) ネキリムシ類は広葉雑草に産卵し、ふ化した幼虫が大豆を加害する。このため、成虫の飛来時期である4月中旬～は種までの間、ほ場内やほ場周辺で広葉雑草が多くなるように、耕うんや除草を行う。多発生が予想されるほ場・地域では、薬剤を種子処理（塗沫）するか、粒剤を土壌表面に散布する。
- (3) 黒根腐病、茎疫病は土壌伝染し、排水不良条件で被害が拡大するため、連作ほ場や排水不良のほ場での作付けを避ける。また、酸性条件下で多発生しやすいことから土壌pHが低いほ場では酸度矯正を行う。茎疫病の発病は、は種深が深くなるほど多くなるため、は種深は3～4cmとする。なお、生育初期に発生する茎疫病に対しては登録のある薬剤の種子処理（塗沫）も有効である。

IV 野菜

1 育苗管理

日射が強くなってくると急激に高温・多湿となることから、葉焼けしないよう育苗ハウス内の温度が上がる前に少しずつ換気する。また、苗の徒長を防ぐため、かん水をやや控えめにし、苗（鉢）間隔を広げる。

2 露地野菜

- (1) 作付前に落水口や排水口から排水が可能か確認し、併せて周囲明きょを施工し一時的な大雨に備える。
- (2) マルチは定植時の地温を確保し活着を促進するので、定植1週間前頃までに行う。
- (3) 長雨等により、定植が遅れる場合は、徒長しないよう苗（鉢）間隔を広げ、十分外気に慣らすとともに、かん水しすぎないように注意する。また、老化苗とならないよう必要により液肥を施用する。
- (4) 定植後の活着を促進するため、耕うんを丁寧に行い碎土を良くする。また、定植前の苗のかん水の他、土壌が乾燥している場合は定植時に植え穴にかん水する。なお、かん水設備がない場合は、降雨後等ほ場の土壌水分が適度な時期に定植する。
- (5) すいかやメロンでキャップを使用している場合、被覆期間は活着までを基本とし、1週間以上の被覆は避ける。
- (6) ハウスすいかでは、交配の3日前にかん水を行い花粉の充実を図る。また、交配後10日間は、夜間保温・保湿に努めるとともに、着果確認後は徐々にかん水量を増やし、裂果を防止する。
- (7) キャベツ、ブロッコリー、そらまめ、えだまめ、たまねぎ等ではほ場が乾燥する場合はうね間かん水を行う。
- (8) 露地アスパラガスで、前年に病害等により早期枯れ上がりしたほ場は立茎時期をやや早める。
- (9) たまねぎで、細菌性病害の発生がすでにみられているほ場もあることから、特に強風後の感染拡大を防ぐため薬剤防除を行う。また、連作ほ場を中心に発生が見られているべと病は、越年罹病株が感染源となることから除去して薬剤防除を行う。

3 施設野菜（トマト、きゅうり、いちご等）

- (1) 今後の果実肥大に備えるため、生育に応じた整枝や肥培管理を実施する。
- (2) 着果負担の大きい時期に急な日射等により高温・多湿になると、落花やガク枯れ等の発生が懸念されるため、細めに換気やかん水、遮光を行う。

- (3) 収穫中のいちごは果実品質を確保するため、換気を強め、昼夜の温度差を確保する。葉かき等により株間の通風を促進し、かん水は少量で多回数実施する。

4 病害虫防除

- (1) 灰色かび病や葉かび病等の病害が発生しやすくなるため、換気により温度・湿度を適切に保つ。病害が発生した場合は、罹病した葉や花びらを除去し、その後防除する。
- (2) 気温の上昇に伴い、施設ではアザミウマ類、コナジラミ類、ハダニ類等が増加する恐れがあり、また、露地でもアブラムシ類等の害虫が発生する恐れがあるので、発生状況に応じて適期に防除する。

V 果樹

1 栽培管理

- (1) 生育速度は平年並み。柿の摘らい、なしやももなどの着果管理が円滑に進むよう、開花予測等により生育状況を把握する。
- (2) 施設栽培では、高温による葉焼け等生育障害を受けやすいので、換気等適切な温度管理を行う。また、過乾燥による生育遅延を避けるため散水を適宜実施する。

2 気象災害対策

- (1) 強風や突風対策として、防風施設やハウスの点検・整備・補修を実施する。
- (2) 霜による被害を受けた場合は、着果・結実管理を最優先して着果量の確保に努める。

3 病害虫防除

- (1) セイヨウナシ褐色斑点病の防除は、生育ステージに合わせた防除を徹底する。また、袋かけ終了までは一定間隔の防除を行い、散布むらや死角がないよう丁寧に散布する。
- (2) もものせん孔細菌病発生園では春病斑の剪除を徹底する。
- (3) 農薬散布等は生育ステージや病害虫発生予察情報に留意し適期に行う。なお、高温時の薬剤散布は薬害の恐れがあるので避ける。

VI 花き

1 球根養成

- (1) チューリップ、スイセン、ユリ等の球根養成ほ場では、降雨等で過湿とならないよう排水を徹底するとともに、乾燥が続く場合には適宜かん水を行う。特に、砂丘畑等乾燥しやすいほ場では、スプリンクラーで定期的にかん水を行う。
- (2) 強風が予想される場合、砂丘畑では飛砂被害が発生する恐れがあるため、土壌が乾燥している時はあらかじめスプリンクラーで散水し、土を湿らせておく。

2 施設切り花、鉢物

- (1) ユリやトルコギキョウ、ヒマワリ等1・2年草切り花類、鉢物類では、天候の急変（好転）時にチップバーン（カルシウム欠乏症）等の生理障害が発生しやすいので、換気や循環扇等による適切な温度・湿度管理を実施する。
- (2) 強日射による葉焼けの発生や日照不足による軟弱徒長に注意し、日射量に応じたこまめな遮光資材の掛け外しを行う。

3 露地切り花

- (1) ユリ、宿根草類等の露地切り花では、降雨等でほ場が過湿とならないよう排水を徹底

- するとともに、乾燥が続く場合には適宜かん水を行う。
- (2) 定植後の活着を促進するため、耕うん・砕土を丁寧に行うとともに、土壤水分を適切な状態にして定植する。
 - (3) ユリ切り花で強光・高温下での定植となる場合は、球根コンテナに覆いをかけるなどして球根の高温・乾燥を避けるとともに、遮光等により定植後の高温障害の発生を防止する。

4 病虫害防除

- (1) 球根養成等の露地栽培では、降雨に伴い褐色斑点病や灰色かび病が発生しやすくなるため、病気の発生状況に応じて適切に防除を行う。強風・飛砂等で茎葉が傷んでいる場合は特に病気が発生しやすいので注意する。
- (2) 気温の上昇に伴い、アザミウマ類やアブラムシ類が発生しやすく、加えて施設ではハダニ類が発生しやすいので、害虫の発生状況に応じて適期に防除する。

Ⅶ 畜産

1 家畜の管理

- (1) 寒暖差の大きいことが予想されるので、畜舎内の乾燥と適正な温度管理を行い、適宜換気と保温（幼畜）を行う。敷料の交換や飼槽の掃除、畜舎内の消毒等を十分に行い、衛生的な管理に努める。
- (2) 急な気温上昇に伴う家畜疾病を予防するため、換気扇、送風機、飲水装置等の点検を行う。また、寒冷紗等の準備をする。

2 飼料作物の管理

- (1) とうもろこしは、収量を確保するため、排水の良いほ場に平均気温 10℃以上になったら早めには種する。良好な発芽を確保するため、砕土、整地、は種後の覆土は丁寧に行う。また、降水量が多い場合に備え、排水の良くないほ場では、明きよを掘る等排水対策に努める。
- (2) イネ科牧草の1番草は収穫適期である出穂期に収穫し、刈り遅れにより栄養価が低下しないよう努める。